入選

失われた景色をめざして

鳴門教育大学附属中学校 二年 島田 唯花

夏休みの宿題で、私は近所の橋から見た川の景色を描いた。夕焼けに輝く川面がともきれいだっただけだ。オレンジ色の夕焼けが、紺色の川面に映る様子を、記憶にとどめておきたかった。

私が住んでいる徳島市は、川がともも多い。水辺の景色がともきれいな街だ。

私が川の景色を描いたのは、これが初めてで、まだ一枚目だ。しかし、画家であった私の祖父は、膨大な数の水辺の景色を書き残している。九十四歳で亡くなるまで、自然豊かな徳島の美しい風景を描き続けた。絵には、短い文章がつけられていて、当時の人々の生活の営みも記されている。

「吉野川河口」という絵では、幅の広い吉野川の河口の砂浜と、土手に咲くあざみの花が描かれている。砂浜では、五月のさわやかな川景色を楽しむ人々が集う。あざみは初夏の風に揺られ、少年は無邪気に犬を追いかけている。美しい水辺には、人を癒す力があるのだなあとしみじみ思う。

「五月の金沢町」という絵にも、楽しそうな水辺の風景が描かれている。こんな文章が添えられている。「今の徳島市金沢町は、昔、板野郡川内村金沢新田と呼ばれていた時代があった。その後、徳島市金沢町になっても、潮入り川の名残の入江や池が多く、子どもたちは魚を捕って遊んだ。小さな流れでも水がきれいで、魚のほかエビやカニもいた。」

この金沢町というところは、祖父の家の近くにある。絵には、網やかごを持って、魚を捕ろうとする子供が描かれているけれど、今、この場所に行っても、魚が捕れそうな場所はない。昔ほどきれいな水辺はもうなくなっている。

「田植えの頃の下大野」という絵では、きれいな水を一面にたたえている田んぼが描かれている。以下のような説明がある。「田植えの頃に八万の下大野辺りから見ると、眉山が遠くに見えた。一面に水を張った田

が何枚も続き、全ての田が空の水色を映していた。その水色の世界に眉山がぽっかり浮かび、いつもより遠く思えるのだった。この時代、水は豊かで、清らかであった。魚や貝も、ホタルやトンボもその水で生きていた。人々は生活用水として使い、子どもたちは歓声を上げて水遊びをした。」

この文章を読んで重要だと思ったのは、水辺は癒しを与えているだけではなく、生命の源であるということだ。人はもちろん、植物も魚も昆虫も、すべて水のおかげで生かされている。水がなければ生きてはいけないのだ。しかし、その豊かな水で満たされた景色は、確実に減っている。昔、魚が捕れた水辺は、今はもう姿を消し、水をたっぷりたえた田んぼも少なくなってしまった。水で潤うことのない環境は、地球上のあらゆる生命を奪っていく。もちろん人間も例外ではない。

では、どうすれば、水が失われる危機を回避できるのだろうか。人口増加や、工業や農業で使われる大量の水、そして気候変動など、私たち一人人では、どうすることもできない問題がたくさんある。水不足に陥るような原因を、人類が自ら作ってきたのだ。こうなってしまう以上、ひとりひとりができることを、行っていくしかない。節水や生活排水に気を配るなど、やれることはまだある。

祖父が描いた水が豊かだったころの絵は、七十年前ごろの景色だ。たった七十年で、人間は豊かな自然を破壊してしまった。絵を眺めると、さみしい思いでいっぱいになる。

しかし、こうも思う。私たちの自覚ある行動で、一年でも二年でも、水が豊かだった頃に戻していく気持ちが必要なのではないだろうか。早速、今からあの失われた美しい景色をめざしたいと思う。大事な水を守っていくと思う。